

広島なぎさ中学校

入試科目		算数	国語	理科	社会	総合
試験時間		50分	50分	45分	45分	—
配 点		100点	100点	100点	100点	400点
受験者平均点		62.0点	47.0点	57.9点	61.0点	227.9点
合格の目安	得点	50点	35点	45点	50点	180点
	(%)	50.0%	35.0%	45.0%	50.0%	45.0%
昨年度との比較		やや易化	難化	やや難化	やや難化	難化

算 数

- [1] 計算問題 (1) 小数の計算 (2) 括弧を含む四則計算 (3) 分数・小数の混合計算 (4) 分数・小数の混合計算
(5) 工夫をする計算
- [2] 一行問題 (1) 約数の個数 (2) 割合(百分率) (3) 割合(分数) (4) 会話文(倍数・約数について) (5) 約束記号
- [3] 場合の数(さいころとオセロ) 小問数：3
- [4] 平面図形(おうぎ形) 小問数：3
- [5] 速さと比 小問数：4

[1] が計算問題、[2] が会話形式を含む一行問題、[3] ～ [5] が大問という例年通りの構成でした。

[1] は計算問題が5題です。あせらず落ち着いて取り組みましょう。
(4) は 0.625、0.75 を分数になおすと素早く正確に計算ができます。

知っておく必要がある知識です。(5) は工夫をすれば早く計算できます。

[2] は一行問題が5問です。(1) は約数の個数、(2) は百分率、(3) は割合の問題です。(4) は毎年なぎさ中学校で出題される会話文形式の

問題です。今年は約数・倍数についての内容でした。問われている内容は難しくはないのできちんと読んで1つずつ理解していけば正解できる問題です。(5)は約束記号の問題です。3けたの数のそれぞれの位の数をすべて足して、その和が1けたになるまで繰り返す問題です。①は計算するだけです。②は逆算です。最後の1けたの数が4になるので、その前は211とか31とか22とか色々考えられます。ただ、3けたという指定があるので、2けたの数を考えていけばよい問題です。また、999から調べていくこともできるので正解できる問題です。

[3]はさいころを2回ふる場合の数の問題です。(2)は2回のさいころの目の出方を数える問題で、1回目と2回目を区別して考えなければいけません。(1)で区別を必要としない問われ方をしているので戸惑った受験生は多かったと思います。(3)はルール通り考えればゾロ目を考えられたはずです。与えられた条件、「オセロのようにはさまれた石は裏返る」というところをきちんと理解できていたかが重要です。

[4]はルーローの三角形という考察者の名前がついた図形の問題です。しかし実態は中心角60度のおうぎ形が組み合わさったもので受験生ならば一度は見たことのある図形でしょう。(2)はこのルーローの三角形の周が中心角60度の円弧3つ分、すなわち中心角180度の円弧の長さであることに気づいてしまえば問題なかったでしょう。(3)は一部、弓形部分を移動させれば中心角60度のおうぎ形3つの面積になること

にたどり着けたかどうかです。しかしオーソドックスな図形移動問題なので正解できた受験生も多かったのではないのでしょうか。

[5]は速さと比の問題です。問題文が長く、条件が複数あるので、読解力とイメージ力を要求されています。(1)は速さの比と、距離の比の関係を問われているだけなので問題なかったでしょう。(2)は文章を読み、状況をきちんと把握できているかどうかポイントになります。(3)(4)は(1)の条件を使わないと解けない問題になっています。(1)の条件が前提になってくるのであれば、問題文にそれなりの指示がなければおかしいのですがそのような記述はありません。受験生はかなり戸惑ったと思います。途中で(1)の条件のもとでの問題だと解釈して回答した受験生がどれだけいたのか気になるところです。さらに比を使って解かないといけない問題なので簡単な問題ではありません。

全体として、受験生のレベルを考えると、標準的な問題もありますが、全体的に難しい内容だといえます。合格最低点は低いでしょう。「合格する」ということだけ考えれば、6割目標で十分だと思います。自分にとって難しい問題はいったんおいて、解きやすい問題でしっかり得点できれば心配ありません。そのためには、過去問に取り組むことで、時間配分を意識するトレーニングを重ね、上の目標点を突破できる力をつけていきましょう。

国 語

I 語句に関する問題

II こまつあやこ『リマ・トゥジュ・リマ・トゥジュ・トゥジュ』

III 山極壽一『ゴリラからの警告』

松村圭一郎『うしろめたさの人類学』

(小問数 15 問)

(物語文 約 2300 字 小問 13 数問 うち記述 2 問)

(説明文 A 約 1700 字

B 約 800 字 小問数 15 問 うち記述 2 問)

なぎさ中学の国語の一番の特徴は、大問 I で出題されていた「表現に関する問題」でした。数百字程度の自作文章を用いて、文章中の相応しくない表現を修正させる問題・グラフの資料を読み取らせる問題が出題されていました。しかし、今年の入試問題では大問 I が、漢字の読み書きと副詞の空欄補充問題で、一般的な語句問題の大問になっています。グラフ資料の読み取り問題は、大問 III の説明文で出題されています。また、物語文・説明文からの漢字の出題はなくなりました。

もう一つの特徴は、「物語文」・「説明文」でオリジナルの文章や資料を加えていることです。今回は、大問 II の「物語文」の問 2 では、本文の内容をまとめた表が、問 3 では本文中の短歌について 4 人の生徒の会話内容が資料として加えられています。また、「説明文」の問 4 で、4 人の会話と資料 I・II が加えられ、4 つの小問に答えさせています。さらに、「説明文」は例年通りに本文が複数の出典から構成され、**A**・**B**に分かれています。こだわりを持って、しっかりと入試問題を作っておられることがよく伝わってきます。

次に、受験者平均点を見てみましょう。多くの中学校が傾斜配点（算数・国語の配点を理科・社会より高くするもの）を採用する中、なぎさ中は、国・算・社・理すべて 100 点の均等配点となっています。当然、教科間のバランスも重要視しているはずです。平均点の動向を見ると、過去 5 年間の 4 教科受験者平均点は 237.9 点。一教科あたりでは

59.5 点です。各教科の受験者平均点の目標は 60 点といったところでしょう。今年の国語の受験者平均点は 47.0 点で、50 点を下回ったのは 2012 年以来です。国語を除く 3 教科の平均点は 60.3 点で、国語の平均点とは 13 点以上の差がありました。国語の平均点が一昨年・昨年と二年連続で 60 点を超えていただけに、今年の国語は誤算であったのか、国語力重視の方針の表れなのか、来年の問題が気になるところです。

では、以下に大問ごとの設問内容を見ていきます。

I 語句に関する問題

前述の通り、昨年までの「表現に関する問題」から、「漢字の読み書き」・「副詞の空欄補充問題」へと変化がありました。問 1 の書き取りは標準的なものばかりでしたが、読みの問題で「束子」が出題されました。設問では「亀の子『束子』を発明したのは男性である。」となっていますが、小 6 生には難問であったでしょう。問 2 は畳語（「いろいろ」のように一部が反復する語）を答えさせる問題でした。全て 4 字の副詞で、「**□■□■**」の**■**に入るひらがなを 5 つの選択肢から選ばせるものでした。「じわじわ」「ありあり」など、様々な状況を表現する副詞の語彙力が問われています。この問いでは、設問をしっかりと読まなければ、考え方・答え方が分かりにくいように感じました。設問内容を理解する力も求められる問題です。

II 物語文の読解問題

中学生の恋愛感情(失恋した先輩がよりを戻すのを手助けし、自分は失恋してしまうという複雑な設定)とマレーシア語混じりの短歌が出てくる出典は、小6の男子生徒には、かなり手強かったに違いありません。

設問構成は、記号選択(語句の意味・内容理解)、内容把握の記述(80字・条件付き80字)、ぬき出し(心情・内容理解)、空欄補充(語句完成・内容理解)などです。目立つものでは、出典に関連して短歌の表現技法についての出題がありました。記述は2題で、どちらも80字です。一つは条件付き(〇〇は～。一方の〇〇は～。という形で、二文に分ける・80字以内・八割以上)で出題されています。問いそのものは、決して難しいものではありませんが、80字の長さであれば、しっかりとした表現力が必要となります。自分の考えを正しい日本語で書けるように、日頃から文を書く機会を増やし、それを推敲する習慣も付けるよう心がけましょう。

Ⅲ 説明文の読解問題

設問構成は、ぬき出し(内容理解、空欄補充)、記述(理由説明100

字、内容理解・条件付き60字)、記号選択(内容理解)、グラフ資料の読み取り問題でした。グラフを正確に読み取れているかが、文章の穴埋めに答えさせる形式で問われています。また、昨年は説明文での記述の出題はありませんでしたが、今年は100字の理由記述と60字の条件付き(指定語3つ・一文で説明・60字以内・八割以上)の2題が出題されています。100字は1題の記述としてかなりの量ですが、この問いに関して言えば、本文の一行57字を目安に文脈から使う箇所を絞っていけば、比較的楽にまとめていけました。

今年のなぎさ中学の国語は、大問Ⅰの出題内容が変わり、物語文・説明文から漢字の問いがなくなるなど、形式上の小さな変化はありましたが、しっかりと手間をかけて丁寧に作る姿勢はさすがだと感心します。

入試対策としては、多くの文章を読み、語句の使い方・正しい表現を身につける必要があります。また、グラフ関連の資料の読み取りも練習が必要です。3～5年分の過去問をしっかり解いて、出題形式に慣れておくことをお勧めします

理 科

- ① 地学分野から、デネブ(大学のボート部の新しい艇の名前の由来)とシリウスの明るさのちがいに関する問題(小問5)
- ② 生物分野から、緑のカーテンから植物のはたらきやアブラムシに関する総合問題に関する問題(小問8)
- ③ 物理分野から、てこのつり合いの計算問題に関する問題(小問6)
- ④ 化学分野から、温度表記の(°F)と°Cに関する問題に関する問題(小問7)

出題分野の偏り。これは、同校の入試問題の構成の特徴の一つですが、昨年度からその偏りが見られることはなく、今年度は地学・化学・物理・生物の4分野から1題ずつバランス良く出題されていました。また出題内容としても、語句や文章記述、計算、実験考察など幅広くなっていました。

① デネブ(大学のボート部の新しい艇の名前の由来)とシリウスの明るさのちがいに関する問題です。(1)は、地球の自転によって観察できない事を選びます。太陽や月、星座などが動くのと月の満ち欠けは原因が違うので、注意が必要です。(2)は、問題文をきちんと読めば正解できたでしょう。(3)～(4)は、受験理科の基礎基本なので、確実に正

解したいところです。(5)は、実際に明るく見えるという事は、地球との位置関係が大きく関係しています。そこに着目して記述できたかどうか、出来不出来に差がついたと思います。

② 緑のカーテンから植物のはたらきやアブラムシに関する総合問題です。(1)～(5)は、全問正解したいところです。(6)は、防虫剤から出る成分が果たして雌花が実になるのを妨げるのかを考える問題で、与えられた選択肢をよく吟味して正しい選択肢を選ぶ必要があります。(7)は、防虫剤を置くことで雌花が実にならなかつた事を記述するのですが、(6)の流れを上手く利用すれば、案外素直に書けたでしょう。(8)は、発芽の3条件の中で何が今回の記述として必要なのか、問題文から読み取れたかがポイントになります。

③ てこのつり合いの計算問題です。普通のとこのつり合いの計算であれば、具体的に何gか重さが与えられるのに対して、同校の問題は個数や何倍の関係だけで、具体的に何gと明記していませんでした。なので、いかに与えられた条件を正確に読み取れるかが、受験生たちに求められたと思います。読解が上手いかなないと、大問3はかなり厳しかった事

でしょう。さらに、計算問題という事もあるので、出来不出来に差があったと思います。

④ 最後に、もう一つの同校の特徴とも言える、先生となぎささんとの長い対話文からの問題です。今年のテーマは【温度表記の(°F)と℃】でした。内容としては、水の状態変化についての問題、摂氏と華氏の計算問題、会話文の流れから空欄に当てはまる文を選ぶ問題など、様々でした。また、摂氏と華氏の違いを知っている受験生は、ほとんどいなかったはずなので、難しかったと思います。会話文から、問題を解く上でヒントをいかに見つけていくかが、重要だと思います。また、大問としてどれだけの正答率があったのか、非常に気になります。

同校の入試問題は解答形式も多様で、説明文や会話文も長いため、決して取り組みやすくはありません。同校の対策として、基本知識を正確に理解し、基本～標準レベルの典型問題を何度も練習しましょう。そして、文章記述において、過去問演習に取り組むときには、すぐに諦めるのではなく必ず自分の手を動かして書く練習をしましょう。

社 会

① 《地理》 日本地理に関する問題(19問)

② 《歴史》 浅野氏広島城入城400年、「400年」という歴史の区切り方に関連する歴史問題(18問)

③ 《歴史》 夏季オリンピックと日本の歴史についての問題(13問)

④ 《公民》 S D G sに関する問題(10問)

2020年度のなぎさ中学入試は、小問数が60問で、昨年(51問)に比べて増加しました。地歴と公民の問題の出題比率はおよそ8:2の割合で、地理と歴史中心の出題といえます。問題数の内訳は、記号選択(26問)・語句記述(26問)・文章記述(8問)となっています。基本問題中心の出題

ではありますが、資料や表、図などの読み取り問題が多く出題されています。ただし、いわゆるクセのない(受験生なら一度は見たことがある)資料から出題されました。また記号選択問題において、「すべて選びなさい」という設問が見受けられました。解答する選択肢の個数を指定せず

に出題すると、難易度は高くなります。ただし全体の難易度は例年並みで受験生も取り組みやすかったと思います。

①は、A～Dの都道府県各地の様子を記録でまとめたものがリード文になっていて、その文章から雨温図や農業、河川や山脈名を答えさせました。それぞれの文章には、どの都道府県かを判断するためのキーワードが散りばめており、難しくはありませんでした。しかし問 10 の広島県の伝統工芸品をすべて選ぶ記号問題は、選択肢のオ「備後餅」、キ「三次人形」、ク「石州和紙」の 3 つの選択肢について戸惑う受験生がいたはずです。

②は、浅野氏広島城入城 400 年、「400 年」という歴史の区切り方に関連する歴史問題でした。歴史に関しても基本的な内容からの出題なので、ほとんどの受験生が解きやすさを感じたと思います。しかし、一方で問題文を丁寧に読み解くことを求めています。問 4 の大仙古墳や聖徳太子の語句を覚えるだけではなく、古墳の埋葬品や政策の内容を理解していないと正解を選べません。また平城京と平安京の違いが曖昧なままだと、地図上の位置が選べません。また問 9 のように時代の特徴を捉えた上でタイトルを考えて 10 字以内で答えさせる問題も同様です。

③は、夏季オリンピックと日本の歴史についての問題でした。問 2 ・問 3 の記号問題は正誤を判断し、さらに正しい組み合わせになっ

ている記号を選択肢から選ぶ形式は、焦るとミスが起こりやすくなります。また問 9 の 1980 年モスクワ大会に日本・アメリカ・イギリスが不参加だった理由を答えさせる問題は、「冷戦(冷たい戦争)」と語句のみで答えると説明になりません。例えば、「冷戦中でソ連と対立していたから。」と書くと説明になります。

④は、国連広報センター所長である根本かおる氏の文章をリード文にした形式で、国連や日本の政治の仕組みと地方公共団体、気候変動に関する問題でした。特に「SDGs」については今後一層の理解と私たち一人ひとりが「何ができるか」を具体的に考えていくものになります。

まとめとして、語句暗記では対応できない考えさせる問題が出題されています。「語句が書ける」からで終わるのではなく、その人物や政策、内容、関連事項などの周辺知識をつなげていく学習が必要になります。